

[江戸時代の絵画展によせて]

尾形乾山筆「武蔵野隅田川図乱箱」について

乾山は晩年に、京の乾山焼の窯を養子の猪八に譲り、江戸に下ります。この時、既に七十才に手が届こうとしていました。京を離れるには、相当の理由があったはずですが、はっきりとは分かっていません。ただ、第四代輪王寺門跡となった公寛法親王に随行したと考えられています。当時、江戸は大名屋敷の集まる大消費都市となっていました。乾山は公寛法親王の心を慰め、江戸に京焼の伝統を伝えることを、最後の仕事に選んだのでしょう。

乾山焼の大きな特色は、雅味に溢れる絵付けにあります。乾山は兄である光琳の協力を得て、鑑賞性の高い陶器を制作しました。乾山にとって、絵と書はともに陶器の絵付けの意匠であったわけです。江戸でも技術指導はしたでしょうが、かなりの高齢に達していたので、実際に手掛けたのは主に絵付けであったと思われます。やがて、その絵付けが陶器を離れて、書や絵画となって独立し、乾山芸術は大きく開花します。特に、自画賛作品において、書画渾然一体とした乾山独特の画境を開きました。まさに大器晩成、乾山の制作意

欲は最期まで衰えませんでした。現在、落款に「八十一才」と記され、没年の作と認められる作品が数点残されています。陶器では「銕絵染付短冊皿」(湯木美術館蔵)、絵画では「定家詠十二ヶ月花鳥図」が没年の作品に当たります。「銕絵染付短冊皿」は、白化粧地に呉須と淡い銕絵具で霞形を表わし、幽玄体など、和歌十体を代表する和歌を一首ずつ記した十枚組の短冊形の皿で、「定家詠十二ヶ月花鳥図」は月次に相応しい花鳥を描き、それぞれ二首の和歌を記した十二枚組の自画賛作品です。晩年の乾山が和歌に象徴される王朝世界に深い関心を寄せていたことが分かります。なお、この二作品に採用された和歌は、いずれも元禄四年に刊行された歌学書『鳴の羽撞』に取められています。

大和文華館が所蔵します「武蔵野隅田川図乱箱」も、没年に制作された作品の一つです。桐箱の見込みに蛇籠と波に水鳥、裏面から側面にかけて薄を描いています。桐箱は四つの側面と底面を丁寧に継ぎ合わせ、四隅を撫でるように丸めています。いわば、桐箱に絵付けした、工芸とも、絵画とも言える作品です。蛇籠は竹や木の枝を粗く編み、河川の護岸に用いる

籠です。見込みの図は流れの早い河の景色と言えます。蛇籠はおおらかに太い墨線で描き、波はやや細い墨線を塗り重ね、墨色は蛇籠よりも濃くなっています。崩れる波頭を巖手のように巻き、二本の線で量感を暗示する略画風の表現ですが、墨を塗り重ねる調子が伝わるのか、波には柔らかな質感が感じられます。波間をくぐる金泥の水鳥は、波頭を恐れる様子もなく、むしろ遊んでいるように見えます。乾山らしい無垢な趣のある図です。一方、裏面の薄は、穂を胡粉と朱、茎を墨と緑青、葉を墨、緑青、金泥で描き、全面に美しく散らしています。花籠に詰められたようです。岩絵具の緑青は本地から盛り上がるため、裏面では剥落が目立ちますが、側面では未だ鮮やかに残っています。もちろん、これらの表裏の図は、全く無関係とは思えません。通常、光琳の蒔絵や乾山の陶器では、表裏の図様は立体的な工芸意匠として、和歌や王朝文学などの主題にまとめられています。例えば、乾山と光琳の合作、「呉須金銀彩松波文蓋物」(出光美術館蔵)では、蓋表と側面の松林と内側の波を合わせて海浜の松林を表わしています。同様に考えれば、この作品の意匠は薄ノ原に囲まれた水鳥の遊ぶ河の景色となります。そこで思い浮かぶのは、『伊勢物語』第九段、東下りの墨田川です。この場面では、主人公の在原業平が、墨田川に遊ぶ水鳥の名が都鳥であることを渡守に聞いて、「名に負はばいざ事とはむ都鳥／

わが思ふ人はありやなしやと」という和歌を詠みます。もし、そうだとすれば、この作品には乾山の望郷の想いが籠められているのかもしれませんが。

この作品の落款は、裏面の左下に、「花洛紫翠深省ノ八十一歳画」と記され、続けて「定家詠十二ヶ月花鳥図」と同じく、「逃禅」朱文小長方印が捺されています。乾山作品では、落款は単なる作者の署名ではありません。鑑賞されることを意識した書と言えます。乾山焼では「乾山」の落款が重要な鑑定の要になることもあります。この作品においても、落款は作品に比して大きく記され、どっしりとした存在感があります。ところが、落款の上には緑青の茎が斜めに重なり、金泥や墨の葉が被さっています。しかし、当初は落款のみで、薄は無かったとも思えません。そう考えるには、右に大きな余白を残す落款の位置は不自然です。右の中央に、まっすぐ伸びる墨の茎があります。その下方に紅白の穂を交互につないで輪を編み、四方にバランス良く墨の葉を配しています。この構成は落款の位置と明らかに呼応しています。おそらく、ある程度、薄を描いて落款を入れ、更に薄を描き加えたのでしょう。つまり、乾山は敢えて落款を薄ノ原に埋めたのです。ここにも、絵と書が渾然一体となって融合する乾山特有の画面空間が表われています。この落款は、まるで京を遠く離れ、武蔵野に一人立つ乾山自身の姿のようです。(中部義隆)

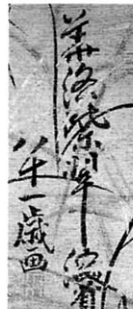
1 武蔵野隅田川図乱箱(表・見込) 重文



2 同(裏)



3 同(落款)



4 呉須金銀彩松波文蓋物 重文 出光美術館蔵

